

# 博物館の学校・地域との連携活動

松尾 厚（山口県立山口博物館）

## Cooperative Activities of Museums with Schools and Local Communities

Atsushi Matsuo (Yamaguchi Museum)

### Abstract

In this report, I describe cooperative activities of Yamaguchi Museum with schools and local communities. We achieved good results through the cooperation.

### 1. はじめに

山口県立山口博物館（以下、山口博物館）では、平成16年度(2004年度)から本格的に博物館と学校・地域との教育連携活動に着手し（開始当初は地域連携を含まず）、大きな成果を上げつつある。博物館（博物館法で言う博物館のことであり、科学館、美術館、動植物園などを含む）と学校との連携は、平成15年の学習指導要領一部改正の際に「総合的な学習の時間」が導入され、その中で博物館の積極的な活用が謳われたのを契機に強く意識され始めた。現在では多くの博物館が連携活動に取り組んでいる。本稿では山口博物館における主に学校連携の活動例を報告し、その効果や問題点について考察する。

### 2. 背景

博物館と学校との連携活動（あるいは博物館の学校への支援活動）は古くから実施されており、明治期から第二次世界大戦前にかけては東京教育博物館（現・国立科学博物館）をはじめ、全国各地に「教育博物館」が存在した。

戦後は社会教育法で「博物館は社会教育のための機関」と規定され、博物館は学校教育支援よりも社会教育を指向する傾向があった。しかし、平成時代に入り学習指導要領の改訂のたびに学校の博物館利用が強調され（表1）、博物館も学校との連携を重要な使命の一つとしてとらえて、これに積極的に取り組むようになった。

表1 学習指導要領の博物館利用に関する記載状況

×：記載なし    △：「実態に応じて博物館を利用」「社会教育施設との連携などの工夫を行う」等、博物館利用について軽く記載    ○：博物館の活用について記載    ◎：「博物館の積極的活用を図る」など強調して記載

告示年 教科	平成元年以前	平成元年	平成10年 (高校は11年)	平成15年 (一部改正)	平成20年 (高校は21年)
小学校理科	×	×	◎	◎	◎
中学校理科	×	×	×	×	◎
高校理科	×	×	×	×	◎
小学校社会	×	○	○	○	○
中学校社会	×	○	○	○	◎
高校社会	×	×	△	○	○
図画工作	×	×	△	△	△
中学美術	×	×	◎	◎	◎
高校芸術	×	×	△	△	△
総合的な学習の時間	—	—	—	◎	◎
部活動（中学）	×	×	×	×	△
部活動（高校）	×	×	×	×	△

### 3. 山口博物館の活動

山口博物館では平成16年度(2004年度)に「博物館・学校連携事業」を立ち上げ(平成19年度からは「博物館・学校・地域連携事業」)、本格的に学校及び地域との連携活動に取り組み始めた。小・中学校各1人の教諭が、毎年、長期研修教員として県教育委員会から山口博物館へ派遣され(期間1年)、事業の実施を通じて教員としての視野拡大、資質向上などの研修に取り組むことになった。この事業成果が極めて大きいことから、平成18年度から派遣教員が教頭1人を含む3人体制となり、さらに平成25年度からは教諭1名が増員され、4人のチームで研修と事業実施にあたっている。

山口博物館は、天文、地学、植物、動物、理工、歴史、考古の7部門にわたって33万点を超える資料を有し、各部門に専門の学芸員が配置されている。連携事業の実施に際しては、山口博物館の特性を十分に生かし、本物にふれる感動体験が実感を伴った理解に結びつくようなものとした。

山口博物館の活動の概要は図1に示すが、もう少し具体的には、

- ① 県内各小・中学校、特別支援学校等への出前授業、移動展示(ミニ博物館)
- ② 社会見学、館内授業、職場体験学習等の来館対応
- ③ 教材の作成、教材貸出、展示室内の学習環境整備
- ④ 教員向けの講座開設、教員研修の企画・運営
- ⑤ 博物館日より、メールマガジン、リーフレット作や訪問などによる広報活動
- ⑥ 小・中学校、特別支援学校等の利用状況、教職員の博物館利用に関する意識などの調査研究・分析
- ⑦ PTA活動、公民館や子供会等が行う教育活動への参画

などである(文献[2])。



図1 山口博物館と学校・地域連携活動の概要(文献[2])

### 4. 活動の成果と特徴

出前授業や来館での利用者数は図2、3のとおりである。出前授業に対する学校の要望は極めて高く、その急増ぶりがわかる。今では派遣教員が4人体制になったにもかかわらず、要望に応じきれないほどである。平成23、24年度の出前授業での利用団体(地域団体を含む)は、それぞれ延べ270~300団体に上る。それに対して来館利用(博物館見学など)は横ばい傾向にある。来館には貸切バスなどを利用する必要があり、学校の経費負担がネックになっている(出前授業は旅費を含め全て山口博物館が負担)。平成23、24年度に出前授業や来館で山口博物館を利用した小・中学校は、各年度とも150校を超える(複数回利用の学校も1校として計数)。県内の小・中学校数は470校なので、毎年、県内全小中学校の3分の1が山口博物館を利用していることになる。

表2には、平成23、24年度の出前授業で要望の多かった実施テーマを示す(文献[1]、[2])。出前授業は山口博物館が20程度のテーマを提示し、その中から学校の要望に応じて実施している。また、学校の要望により新たなテーマを設定することもある。表2のとおり、天体教室(夜間の天体観察を含む)

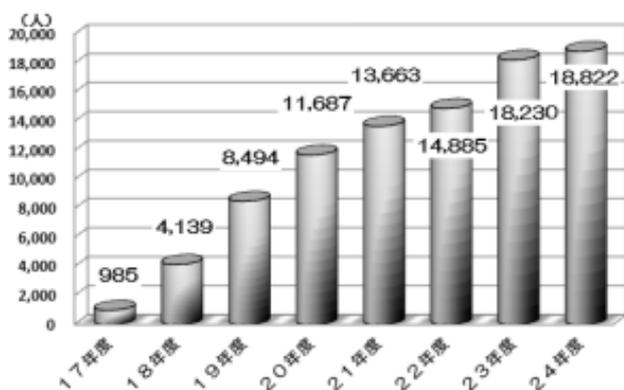


図2 出前授業利用者数の推移 (文献[2])

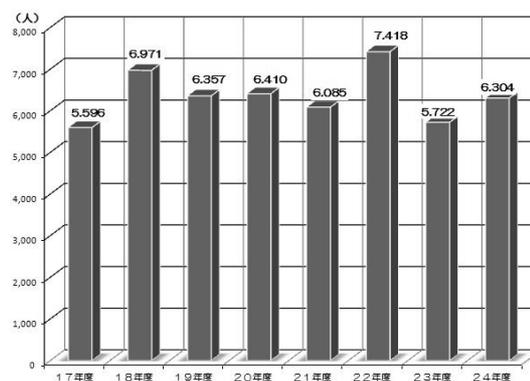


図3 来館利用者数の推移 (文献[2])

の実施は非常に多い。地質関係の要望も多く（この表の他に、化石クリーニング、岩石と鉱物などのテーマでも実施）、これらを合わせて「地学」とすると、利用団体の1/3程度が地学のテーマを希望することになる。地学の不得意な（高校・大学で学習していない）教員が多いことが原因のようである。

表2 出前授業の実施テーマ（上位7テーマ）

平成23年度（2011年度）			平成24年度（2012年度）		
順位	テーマ	利用団体数	順位	テーマ	利用団体数
1	天体教室	67	1	ロボット教室	50
2	化石レプリカ作り・大地のつくり	43	2	天体教室	43
3	ロボット教室	40	3	化石レプリカ作り	28
4	勾玉作り	20	4	勾玉作り	20
4	昆虫教室	20	5	葉脈標本作り	18
4	移動ミニ博物館	20	6	昆虫教室	16
7	葉脈標本作り	15	7	埴輪作り	15

## 5. 連携事業の効果と課題 (文献[2])

### (1) 学校にとっての効果

- ・博物館を利用することで、学校の教育活動の活性化に役立つ。
- ・出前授業、社会見学、職場体験学習などの活動を通して、学校では直接体験が困難な実物資料を使った質の高い学習支援を受けることができる。
- ・教員対象の研修会では、「自らの授業に取り入れてみたい」「改めて実物資料の良さを感じた」等の声が聞かれる。このように、教員に対して授業改善に向けた意欲づけを図ることができる。

### (2) 博物館にとっての効果

- ・博物館への興味、関心を持つ人が増える。
- ・博物館活動の活性化に役立ち（利用者数の増加、学校・教員との交流の深まり）、博物館の社会への貢献度が増す。
- ・学芸員の調査研究が、小中学校の子どもたちや教員に生かされる。

### (3) 長期研修教員にとっての効果

- ・学校現場を離れて、新しい視点で学校を見ることができ、今後の学校経営に役立つ。
- ・博物館の収蔵資料に触れたり、学芸員の調査研究を学んだりすることで、自らの資質、授業力向上につながる。

- ・学校現場では出会わなかったであろう、県内外の人々との交流を持つことができ、人間としての視野を広げることができる。

#### (4) 今後の課題

学校との連携事業には主に長期研修教員があたっているが、研修期間が1年なので教員が毎年交代する。このため毎年の引継が必要になり、年度始めの不慣れな時期は円滑な活動ができないなど、かなり大きな問題がある。

出前授業においては、学校が博物館へ任せきりの傾向がある。学校との打ち合わせを密にし、利用校の授業参画を促すなど、効果的な指導法を検討する必要がある。また、博物館のもつ多種・多様な教育資源と小中学校の学習内容（指導要領や教科書）との関連を明確にし、学校が年間の授業計画に組み込みやすいものとする必要がある。さらに、博物館の資源を生かした新しい学習プログラムの開発も必要である。

## 6. おわりに

前述のとおり山口博物館では、長期研修教員の受け入れにより学校・地域連携に大きな成果を上げている。また、研修教員にとっても出前授業で多くの学校を訪問できるなど、その研修効果は大きい。派遣が1年交代であるなど課題も多いが、この制度の下では博物館を熟知した教員が毎年4名ずつ生まれる。長期研修経験者は、年に2回、山口博物館に集まって連携推進についての会議を開いている。わが国では学校に図書館はあっても博物館がなく、博物館の活用方法など博物館リテラシーが不足していると言われる。山口博物館ではすでに25名の長期研修教員を送り出し、今後10年間継続すれば65名に達する。山口県の全小中学校の7校に1人の博物館経験教員（それも1年間という長期の）がいることになる。これらの教員は、学校教育全体における博物館リテラシーの向上に大きな貢献をする。全国には連携担当の学芸員や指導主事を配置している博物館も多いが、1年間の研修教員派遣も大いにメリットがある。博物館と学校との連携を深め、博物館リテラシー向上のための有効な方法と考える。

## 参考文献

- [1] 秋山久生・木下 実・西田正和, 2012, 「平成 23 年度博物館学校地域連携教育支援事業報告書」, 山口県立山口博物館.
- [2] 中川真治・河野浩二・角田善彦, 2013, 「平成 24 年度博物館学校地域連携教育支援事業報告書」, 山口県立山口博物館.

## 質疑応答

Q：学校からの利用は全県の何%くらいか？（縣 秀彦）

A：来館利用、出前授業を合わせて約3分の1である。

Q：博物館・科学館が、中高校生のクラブ活動の場となることは難しいか？（縣 秀彦）

A：これまでも部活動での博物館利用はあるが、現時点では日常的な活動場所とすることは想定していない。

Q：出前授業のスタッフは主に長期研修教員か？（茨木孝雄）

A：そうである。学校の要望や必要性により学芸員も出かけている。

Q：驚異的な出前授業の数だが、全国でもトップか？（茨木孝雄）

A：正確なデータは持っていないが、博物館関係者の会合で聞く限りではおそらくトップだと思う。